

【NOTE】

絵はがき『平和記念 東京博覧會 原色写真版』（異本）

久保田稔男

国立科学博物館産業技術史資料情報センター
〒305-0005 茨城県つくば市天久保4-1-1

The Picture Postcards Titled “The Tokyo Peace Exhibition, Tri-color Printing” (Alternative Version)

Toshio KUBOTA

Center of the History of Japanese Industrial Technology, National Museum of Nature and Science,
4-1-1 Amakubo, Tsukuba-shi, Ibaraki 305-0005, Japan
e-mail: kubota@kahaku.go.jp

Abstract The picture postcards titled “The Tokyo Peace Exhibition, Tri-color Printing” (alternative version) are a set of the postcards that were prepared for the opening of the 1922 (Taisho 11) exhibition in Tokyo’s Ueno Park. The prewar-era exhibition did more than dispatch news of the latest developments in a variety of fields. Analyses of picture postcards featuring the pavilion as the motif indicate the exhibition also conveyed new ideas about architecture. It is thought that the collection of these documents enables us to know how the ideas caught on and spread in Japan. A postcard introduced earlier with the same title differed in content. By sorting the similarities including the design of the address side and the caption notation, as well as differentiating the times subjects were photographed, we learn that this postcard, as an “original” so to speak, is closer than the earlier one to the form of postcards initially sold in connection with the exhibition.

Key words: The Tokyo Peace Exhibition, Bunriha Kenchiku Kai, picture postcard

1. はじめに

先に、絵はがき『平和記念 東京博覧會 原色写真版』について報告した¹⁾。今般、上記絵はがきと表題は同じだが、内容が異なる、別の組み合わせの絵はがきが存在することがわかり、国立科学博物館で収集した。便宜的に先に紹介したものを「原本」と称し、それとは異なる「異本」としてここに紹介する。

先に記した内容²⁾と重複するが、平和記念東京博覧會は、1922（大正11）年3月10日から7月31日まで、上野公園を会場として催された博覧會である。第1次世界大戦の終戦を記念して開催されたもので、戦前期に上野公園で開催された他の博

覧會と同じく、殖産興業・貿易振興を目的として開催された。

本博覧會は近代建築史分野において、以下の2点について特筆される博覧會である。

- 1) 会場内に「文化村」として展示された実験住宅の数々により、それまでの日本になかった居間中心型の住居形式が提案され、日本における、その後の住宅建築の設計に影響を与えた。
- 2) 日本における最初の建築運動として知られる「分離派建築会」の主要メンバーが、本博覧會の一部のパビリオンを設計し、過去の建築様式にとらわれない新たな建築を目指すという彼らの思想を、実物でもって体現した最初の機会となった。

1)については、内田青蔵博士らを筆頭に、日本近代住宅史における研究テーマとして数多くの論考がなされている。しかしながら2)については近代建築史の通史の中で必ず取り上げられるものの、分離派建築会の主要メンバーが実作デビューした博覧会、といった程度の紹介にとどまり、これまで深く考察されたことがなかった。

また近年では、同博覧会を「新様式・技術の実験場」と位置づけた指摘もなされている³⁾。

筆者はかねがね、日本近代建築史における上野公園という場所性に着目し、上野公園は日本の近代建築史を語る上で、各時代を象徴するような歴史的建造物が一カ所に集中して現在も残されている珍しいフィールドであることを紹介してきた。周知のとおり、上野公園では戦前期に度々博覧会が開催されている。他の産業分野も同様であるが、建築分野においても、新種の取り組みや新たな発明発見が博覧会場を情報発信源として、日本各地に伝えられたと思われる。平和記念東京博覧会において、分離派建築会のメンバーによって作られた最初の実作が、どのような形で建築界のみならず、当時の日本国民に認知され受け入れられていったのか、その過程を明らかにするための有力な資料となると思われるところから、博覧会の各パビリオンを掲載した絵はがきである『平和記念 東京博覧会 原色写真版』(異本)を収集した。本稿では、収集した資料の概略について紹介するとともに、原本との差異について述べる。

2. 本資料の構成

本資料は、絵はがきを収納する封筒と13枚の絵はがきとで構成され、収納された絵はがきの枚数は原本・異本ともども同じ数である。

封筒は原本と同一で中央に「平和記念／東京博覧会／原色写真版」とその表題が記され、表題の下に白いハトを描くとともに、その周りを円形にリース状の装飾で取り囲んだ図案がカラーで印刷されている(図1)。しかしながら原本にあった、ハトを図案化し、中に「平和記念博覧会／大正十一年三月開會」の文字を入れ込んだスタンプは異本では見られない。

絵はがきの宛名面は、原本が、先に「赤系」・「青系」と分類した、デザインの異なる2種類のもので構成されると整理したのに対し⁴⁾、異本ではすべて「赤系」と分類したものと同様のデザイン



図1 絵はがき『平和記念 東京博覧会 原色写真版』(異本)の封筒



図2 絵はがき『平和記念 東京博覧会 原色写真版』(異本)の宛名面

がなされ、「郵便はがき／union Postale universelle.／CARTE POSTALE／MADE IN JAPAN」と茶色のインクで印刷され、切手貼付欄にパレットと絵筆を図案化したイラストが描かれている(図2)。

絵画面(宛名面とは裏側の面)についても、原本で赤系として分類した絵画面と同様で、画面下部に、掲載された写真のタイトルが記載され、その文字が赤色で印刷されるとともに、タイトルの冒頭は「(平和記念東京博覧会)」と括弧書きされた博覧会名で始められている。

以上の類似点から、異本を構成する絵はがきは、すべて原本でいうところの「赤系」に分類できる。



図3 絵はがき『平和記念 東京博覧會 原色写真版』（異本）「(平和記念東京博覧會) (其一) 北海道館 樺太館 (其二) 満蒙館 朝鮮館」の絵画面

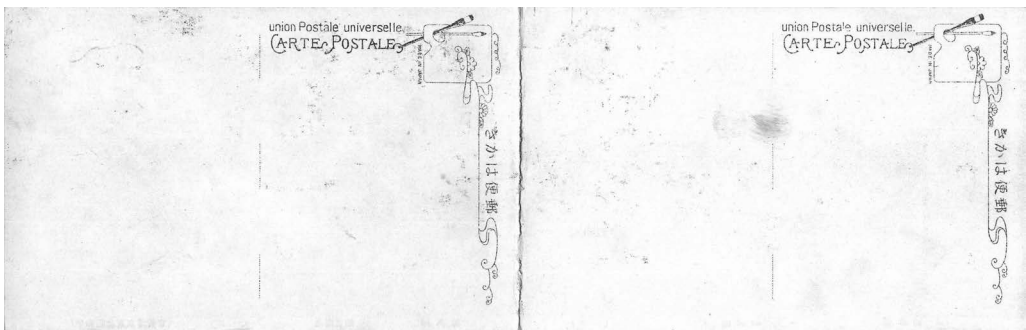


図4 絵はがき『平和記念 東京博覧會 原色写真版』（異本）「(平和記念東京博覧會) (其一) 北海道館 樺太館 (其二) 満蒙館 朝鮮館」の宛名面

原本の「赤系」の絵はがきには、前述のハトを図案化した「平和記念博覧會／大正十一年三月開會」の押印があったが、異本の絵はがきには収納されている封筒同様に押印はなされていない。

絵はがきのサイズは、おおむね141mm×90mm前後となり、原本の「赤系」として整理した144mm×92mmもしくは142mm×92mmよりはやや小ぶりな寸法で、各絵はがきそれぞれに微妙な寸法の差異が見られるものの、加工精度に起因すると思える程度の違いである。

特筆すべきは、絵はがき2枚分を横位置でつなげたサイズの、いわばパノラマ絵はがきとも呼べる絵はがきが含まれていることで、絵画面には横長のパノラマ写真を掲載し、宛名面には通常サイズの2枚分の宛名面が連なって印刷され、それを二つ折りにして封筒に収納するようになっている（図3, 4）。異本においてこのパノラマ絵はがきは全部で3枚あり、「(其一)」から始まる番号にしたがって、全3枚を並置すると、不忍池周辺に連なる博覧會第2会場の様子を一望した、壮大なパ

ノラマ写真として認識できる構成となっている。

絵画面に採用されている写真の被写体は、原本同様、博覧會のパビリオンや塔といった博覧會施設で、モノクロ写真をもとに彩色を施したカラー印刷であるが、異本では複数のパビリオンを町並み的にとらえた構図のものがいくつかあり、前述のパノラマ絵はがきはまさにこの構図によったものである。

遠景でわかりづらい絵はがきもあるものの、原本の赤系同様、被写体には博覧會施設とともに人物が写されており、博覧會のにぎわいを伝えるものとなっている。

3. 異本の特徴と原本との差異

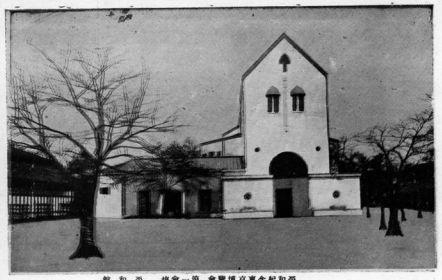
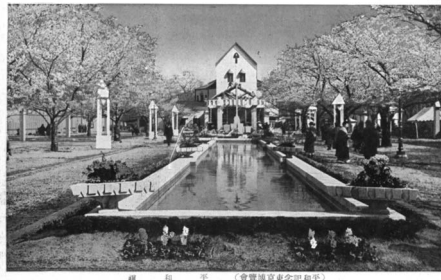
異本の特徴を明らかにするため、原本との差異について述べる。

試みに、原本と異本とでどの施設が画題として取り上げられているかを整理すると、表1のようになる。特に同一施設が原本と異本の両方で掲出

表1 施設別による原本と異本の絵はがきの構成

	原本	異本
第一会場正門	○「第一会場正門」(赤系)	
水産館		○「水産館」
平和塔		○「平和塔」
外国館		○「外国館入口」 ○「台湾館 英国館 外国館」 ○「(其一) 北海道館 台湾館 外国館 (其四) 住友館 電気館 動力機械館」
電気館		○「(其一) 北海道館 台湾館 外国館 (其四) 住友館 電気館 動力機械館」
動力機械館	○「動力機械館」(赤系) 	○「(其三) 水晶塔 台湾館 外国館 (其四) 住友館 電気館 動力機械館」 
林業館		○「(其五) 交通館 (其六) 航空館 林業館」
北海道館		○「(其一) 北海道館 台湾館 外国館 (其四) 住友館 電気館 動力機械館」
樺太館	○「樺太館」(赤系) 	○「(其一) 北海道館 樺太館 (其二) 満蒙館 朝鮮館」 
満蒙館		○「朝鮮館 満蒙館 台湾館」 ○「(其一) 北海道館 樺太館 (其二) 満蒙館 朝鮮館」
朝鮮館		○「朝鮮館」 ○「朝鮮館 満蒙館 台湾館」 ○「(其一) 北海道館 樺太館 (其二) 満蒙館 朝鮮館」
台湾館		○「台湾館 英国館 外国館」 ○「朝鮮館 満蒙館 台湾館」 ○「(其一) 北海道館 台湾館 外国館 (其四) 住友館 電気館 動力機械館」
英国館		○「台湾館 英国館 外国館」
住友館		○「(其一) 北海道館 台湾館 外国館 (其四) 住友館 電気館 動力機械館」
文具館		○「文具館 ライオン塔 建築館 平和館」

表1 施設別による原本と異本の絵はがきの構成（つづき）

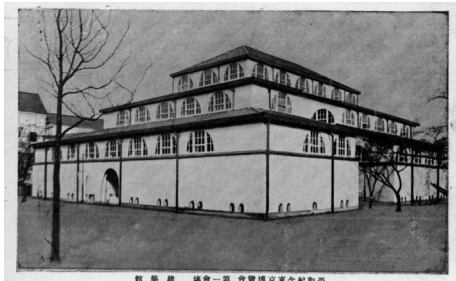
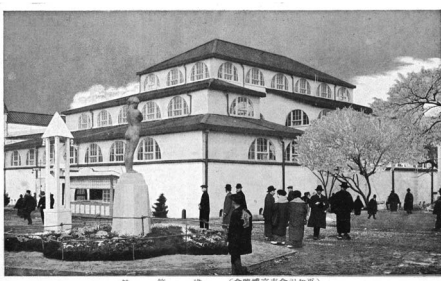
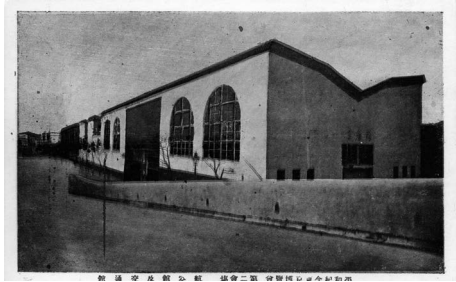
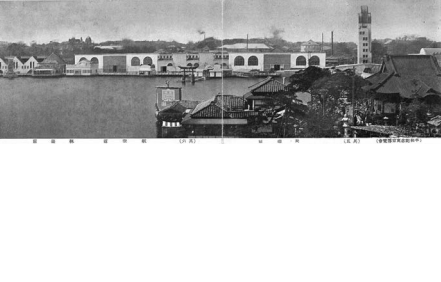
	原本	異本
水晶塔		○「(其三) 水晶塔 樺太館 (其二) 満蒙館 朝鮮館」
ライオン塔		○「文具館 ライオン塔 建築館 平和館」
演芸館	○「演芸館」(赤系)	
万国街	○「万国街」(赤系)	
龍宮館	○「龍宮館 龍宮門」(赤系)	
龍宮門	○「龍宮館 龍宮門」(赤系)	
平和館	○「平和館」(青系) 	○「平和館」  ○「文具館 ライオン塔 建築館 平和館」 
染織別館	○「染織別館」(青系) 	○「染織別館」 

された絵はがきについては、比較のため図版も掲載する。

表からわかるとおり、原本と異本の間で同一の絵はがきはない。原本がどちらかといえば、建物単体を被写体とした絵はがきであるのに対して、

異本は前述のごとく複数のパビリオンを町並み的にとらえた構図の絵はがきがいくつか見られ、異本の中では同一の施設が、他の絵はがきでも繰り返し画題として取り上げられていることがわかる。複数登場する施設として、「朝鮮館」・「外国

表1 施設別による原本と異本の絵はがきの構成(つづき)

	原本	異本
建築館	○「建築館」(青系) 	○「建築館」  ○「文具館 ライオン塔 建築館 平和館」 ※図版は前掲のため略す
蚕糸館	○「蚕糸館」(青系)	
美術館	○「美術館」(青系)	
農産館	○「農産館」(青系)	
航空館及交通館	○「航空館及交通館」(青系) 	○「(其五) 交通館 (其六) 航空館 林業館」 

※「 」内は絵はがき記載のタイトル。下線は筆者による強調。太枠線で「青系」の絵はがきを区別した。

館」・「台湾館」がそれぞれ3枚の絵はがきに掲出されており、その他にも「満蒙館」などが複数枚に渡って登場するところから、異本は異国の文物に注目して構成し売り出された絵はがきのセットであると見ることもできる。

なお、原本と異本とで、分離派建築会会員である、堀口捨巳の設計による「動力機械館」ならびに「航空館及交通館」が取り上げられているが⁵⁾、原本では建物単体の紹介であるのに対し、異本では隣接する建物の中のひとつという形で取り上げられており、本建物が特に新奇なものとして注目されていたかどうかまでは、本資料からは読み取れない。一方、絵はがきのタイトルとしての記述はなされていないが、「(其五) 交通館 (其六) 航空館 林業館」と題された絵はがきの中には、「池塔」の姿が収められており、こちらも堀口捨巳の設計⁶⁾によるもので、タイトルとしての表記は

ないものの、他の施設に並んで画角に収められていることは、本博覧会を象徴する施設として意識されていたものと考えられ、特筆される。

また、平和館、建築館、染織別館を取り上げた絵はがきは、原本と異本とで、建物をほぼ同じアングルで撮影しているものの、異本では周囲に桜が咲き、人々が散策する「にぎわい」を感じさせる写真であるのに対して、原本では、樹木は幹と枝のみである。人物は写っておらず、花壇や彫刻といった外構も見られない「さびれた」印象の写真として認識できる。植栽が枝のみで、人物が写っていないという特徴は、先に原本で「青系」として整理した絵はがきすべてに共通した特徴であり、「青系」の写真は博覧会開会前の、まだ工事中の段階に撮影された写真であると考えられる。

先に原本を紹介した際、「赤系」・「青系」の2種類の絵はがきに分類できたところから、当初「赤

系」で構成されていた絵はがきが、時代を経ることでその一部が散逸し、別途青系の絵はがきが組み合わされ、現代に伝わったものと推測した。今回、異本の存在が明らかとなり、その異本が「赤系」と分類できる絵はがきのみで構成されているところから、本来『平和記念 東京博覧會 原色写真版』と銘打って販売された絵はがきは、「赤系」の絵はがきで構成されたセットとして販売されていたのではないかと推測される。

しかしながら、原本の「赤系」絵はがきと異本の絵はがきを比較すると、その中に同一の絵はがきは存在せず、このことから考えるに、『平和記念 東京博覧會 原色写真版』と題して売られた絵はがきは、異なった組み合わせのものが複数存在し、それぞれ別の商品として販売されていたことが考えられる。

以上のことから、これまで「異本」としていた本資料を、今後は正本あるいは原本と位置づけ、先に取り上げた絵はがきを「異本」と改名して、区別する。

3. 今後の展望

先に記した内容⁷⁾と重複するが、時代の新旧を問わず、博覧会等の催し物開催にあたって作成される絵はがきは、イベントの主催者がなにを見どころとして考えていたのか、あるいは絵はがきを制作・販売する事業者がなにを新規なもの・珍奇なものにとらえていたか、その意識の反映であると考え。博覧会場で売られた絵はがきは膨大な種類に及ぶと思われ、そのすべてを収集することは不可能ではあるが、ある程度まとまった数を収集し、画題として取り上げられた被写体の登場数を定量的に分析すれば、おのずと主催者や事業者の意図や国民の受け止め方の傾向が見えてくると考える。

今回、先に収集した「原本」とは内容の異なる「異本」の存在が明らかとなり、両者は別物とみなすことが妥当と考えられるが、画題としてどちらか一方だけで取り上げられる施設と、両者で取り上げられる施設とがあることが明らかとなった。その他の絵はがきにも対象を広げることによって、取り上げられる対象について、より何がしかの傾向が見えてくることが期待される。

本稿の冒頭で述べたとおり、平和記念東京博覧会は、日本で最初の建築運動である分離派建築会

のメンバーが、実作を初めて発表し、新様式・技術の実験場ともなった建築史上においても特別な博覧会である。博覧会のパビリオンを画題とした絵はがきを多数比較検討することによって、そこで発信された、新しい建築の情報が、建築界のみならず日本国民にどのように受け止められたのかわることができると考えられ、本資料はこのような観点から、重要な資料として位置づけられる。

参考文献

- 1) 久保田稔男, 2015. 「絵葉書『平和記念 東京博覧會 原色写真版』」, 国立科学博物館, Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. E, 38: pp. 57-65.
- 2) 前掲. 「絵葉書『平和記念 東京博覧會 原色写真版』」, pp. 57-58.
- 3) 太田侑作他, 2016. 「建築専門誌にみる戦前国内博覧会の建築潮流」, 『2016年度大会（九州）学術講演梗概集・建築デザイン発表梗概集』 日本建築学会, pp. 929-930.
- 4) 前掲. 「絵葉書『平和記念 東京博覧會 原色写真版』」, pp. 58-59.
- 5) 神代雄一郎, 1968. 「日本における近代建築思潮の形成」, 建築学大系編集委員会『建築学大系6 近代建築史』 彰国社, p. 302.
- 6) 前掲. 「日本における近代建築思潮の形成」, p. 302.
- 7) 前掲. 「絵葉書『平和記念 東京博覧會 原色写真版』」, pp. 57-58.
- 8) 東京府庁, 1924. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』 東京府庁, p. 96.
- 9) 前掲. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』 東京府庁, p. 98.
- 10) 前掲. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』 東京府庁, p. 98.
- 11) 前掲. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』 東京府庁, p. 100.
- 12) 前掲. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』 東京府庁, p. 104.
- 13) 前掲. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』 東京府庁, p. 104.
- 14) 前掲. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』 東京府庁, p. 110.
- 15) 前掲. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』 東京府庁, pp. 109-110.
- 16) 前掲. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』 東京府庁, p. 112.
- 17) 前掲. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』 東京府庁, p. 190.
- 18) 前掲. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』 東京

- 府庁, p. 192.
- 19) 前掲. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』東京府庁, p. 262.
- 20) 前掲. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』東京府庁, p. 107.
- 21) 前掲. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』東京府庁, p. 108.
- 22) 前掲. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』東京府庁, p. 262.
- 23) 前掲. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』東京府庁, pp. 92-93.
- 24) 前掲. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』東京府庁, p. 190.
- 25) 前掲. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』東京府庁, p. 105.
- 26) 前掲. 「絵葉書『平和記念 東京博覧會 原色写真版』」, p. 61.
- 27) 前掲. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』東京府庁, p. 106.
- 28) 前掲. 『平和記念東京博覧會事務報告 上巻』東京府庁, p. 106.

絵はがき『平和記念 東京博覧会 原色写真版』（異本）目録（1/3）

封筒



00 【平和記念 東京博覧会 原色写真版】

絵はがき



01 【(平和記念東京博覧会) 平和館】
本博覧会のテーマである「平和」の象徴として作られ、映画・講演・コンサートの会場として使われた。正面の「甍」(切妻部分)に平和の鐘をつるして鳴らし、入り口の両側には新海竹太郎の手になる「平和の女神像」が設置された。現在の竹の台広場の、噴水のあたりに建設された⁸⁾。



02 【(平和記念東京博覧会) 染織別館】
現在の竹の台広場に位置し、2階建てで「破風造ノ瀟洒タル日本趣味ヲ加味」した建物として報告されている⁹⁾。



03 【(平和記念東京博覧会) 建築館】
現在の竹の台広場に位置し、外観上は3層の建物だが、実際は平屋建ての建物として建設された¹⁰⁾。



04 【(平和記念東京博覧会) 水産館】
正式には「食料館水産館」と記録された施設で、現在の国立科学博物館地球館のあたりに位置し、主屋・塔・下家の3部分で構成された建物である¹¹⁾。

絵はがき『平和記念 東京博覧会 原色写真版』(異本) 目録 (2/3)



05 【(平和記念東京博覧会) 平和塔】

現在の清水観音堂の西に位置し、第二会場への入り口となる建物。斜路を用い第一会場と第二会場との高低差を埋める歩道橋の役割も果たした¹²⁾。



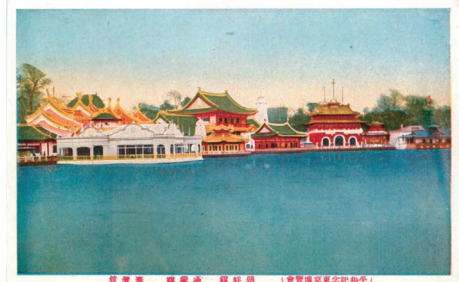
06 【(平和記念東京博覧会) 外国館入口】

正式には外国本館と称される建物で、鉄骨ならびに鉄筋コンクリート造の「近世復興式」の建物である¹³⁾。



07 【(平和記念東京博覧会) 朝鮮館】

朝鮮式宮殿を模し、極彩色を施した建物で、第二会場の偉観と評された¹⁴⁾。



08 【(平和記念東京博覧会) 朝鮮館 満蒙館 台湾館】

- ・朝鮮館(中央)、台湾館(右)は目録07, 09を参照。
- ・満蒙館(右側の建物)は正確には「関東庁満鉄会社出品館」といい、本館と、両妻側にある塔家からなり、中国の宮殿を模倣した建物である¹⁵⁾。



09 【(平和記念東京博覧会) 台湾館 英国館 外国館】

- ・台湾館は「台湾風木造ペンキ化粧塗構造」として報告された建物である¹⁶⁾。
- ・英国館は清楚なドームをもった白亜の建物として紹介された建物である¹⁷⁾。
- ・外国館は目録06を参照



10 【(平和記念東京博覧会) 文具館 ライオン塔 建築館 平和館】

- ・文具館は正式には「東京文具館」という¹⁸⁾。
- ・ライオン塔はライオン歯磨の広告塔で、練歯磨の容器の上にうがい薬の容器を積み重ねた形状のデザインがなされた¹⁹⁾。
- ・建築館、平和館は目録03, 01を参照

絵はがき『平和記念 東京博覧会 原色写真版』（異本）目録（3/3）



- 11 【(平和記念東京博覧会) (其一) 北海道館 樺太館 (其二) 満蒙館 朝鮮館】
 ・北海道館は「ルネッサンス式」と記録された建物である²⁰⁾。
 ・樺太館は樺太庁の建物を模倣し、樺太住民の文化・産業を展示した²¹⁾。
 ・満蒙館は目録08、朝鮮館は目録07を参照。画面上、朝鮮館の手前に、不忍池上に張り出して建っているのは、「朝鮮食堂」と称した食堂である²²⁾。



- 12 【(平和記念東京博覧会) (其三) 水晶塔 台湾館 外国館 (其四) 住友館 電気館 動力機械館】
 ・水晶塔は不忍池内に設置されたつちや足袋の広告。ガラス張りで塔の頂上から水を落とした²³⁾。
 ・台湾館は目録09、外国館は目録06を参照。
 ・住友館は「建築意匠ノ壮麗新奇ニシテ（中略）異彩ヲ放テル建築物」²⁴⁾と報告された建物である。
 ・電気館は「電気工業館」のことで「薄緑色ノ直線的建築物」²⁵⁾と紹介されており、絵はがきの色合いとはだいぶ異なることがわかる。
 ・動力機械館は、分離派建築会の堀口捨巳により設計された建物である²⁶⁾。



- 13 【(平和記念東京博覧会) (其五) 交通館 (其六) 航空館 林業館】
 ・交通館、航空館は「航空館交通館」²⁷⁾として第二会場に建設された。
 ・林業館は正しくは「林業館鉾産館」で、画面に映っている部分は鉾産館の部分にあたる²⁸⁾。